

◇書評

100年の対話
写真で見る世界の百年、日本の百年
「20世紀」
(集英社創業70周年記念・世界7カ国共同編集)

評者・佐々木昭一郎

(キャパのつぶやき)

「下手だが、よい写真」は、「技術的に優れてはいるが、つまらない写真」よりも、はるかによい。

「写真がなかった時代は不幸だ。
しかし、映像が氾濫する時代は、もっと不幸である」

(ラグタイム)

ルイジアナの街角。口笛ふきながら、抒情家の写真屋が窓を開けた。
「世界には星の数ほど、人がいる。ということは、瞬きの数ほど、写真はあるのさ。
その全てを見られるのは一体、誰だい？
全世界をあぶり出す太陽だけか？
見ろ、人がマバタキする。その度に記憶の星はきらめくではないか！。神様教えたまえ、私の
アルバムは、誰が見る？」

(語り部写真師)

私事にまつわる慎みなき話題で、どうかと思うのだが、私の母親は人一倍、記憶力がよかった。
写真が民衆の間に普及していない明治の生まれであったせいか、少女期からの身辺事情をよく語
って聞かせた。その語り口は私の創像力を刺激した。夢幻的画像が連続して現れ、音声から映像
を生む楽しみが膨らんでいった。語り部の声を聞き、育ったという次第である。

(記憶のシミ)

「日光写真少年」と題しフィクションを書き始めた。単独疎開少年の話である。
終戦の少し前、「日光写真」と呼ばれる印画紙が流行った。黒い包装紙の中身はトランプ大の
印画紙だ。布袋の中で印画紙をつまみ出し、掌にはさみ呪いを唱える。すると、頭の中で描いて
いた通りの写真が焼き付く、と効能書にあった。しかし、写るのは人影に似たシミだけである。
それでも、律儀な少年たちは、いつか必ず会えるであろう親兄弟の顔を二重想像し、泣いた……。
一人の少年が命からがら空襲から逃れる。照明弾が照り返す。真赤に染まった空を睨みつける。
声を押し殺す。「母さん恋し兄弟会いたし人殺し！」。彼は、東北から西南へ本土を縦断し放浪を
続ける。8歳の少年にとって、単独放浪疎開は、普通の出来事である。「ゴメンクダサイ。自分
を使って下さい！」見知らぬ家を一軒一軒まわる。食にありつく。「ジブン」は軍隊用語である。
「ボク」では殴り倒される。

単独放浪疎開少年にとって、大自然は本の代わりだ。自由気ままに空想出来る場所は他にない。この絶対の孤独！

(この、一冊！)

すばらしい本に出会った。写真集「20世紀」。見開き全面に、歴史的写真が500枚。簡潔な解説がなされた421頁の写真集である。500枚……一体どういう方法で、これらの写真を集めたのか。有名な写真もあるが、殆ど初めて見るものばかりである。どのような方法で版權をクリアしたのか……疑問を解決するため集英社に出かけた。

(好評嘖嘖、写真集「20世紀」)

「20世紀」を編んだ寺田編集長に会った。

「500枚は6万枚の中から選びました。版權の交渉は5年がかりでシュテルンがやってくれました。通信費と手間だけでも大変だったのです。バブル以前からの企画でしたが、印刷諸経費などを考えると日本では赤字になります。すべてシュテルンにまかせました。「20世紀」の最大の魅力は無論、写真それ自体の表現力にあります。百年の価値です。主に欧米のカメラマンによるものです。残念ながら、日本には彼らに対抗できる報道家はいません……その落差は何でしょうね……」。

映像には、我を忘れさせる力がある。「20世紀」500枚の写真は「忘我」に満ち溢れた力業の、国際的集大成である。

(動物園)

……なぜ、欧米の報道マンに対抗出来る「忘我」の力業がないのか……。寺田さんの一言から思い起こした。三島由紀夫が「東大を動物園にしろ」と揶揄した頃、私は助監督の仕事についていた。監督は、才能豊かな東大出の、映像をよく知った男である。撮影の合間に聞いた。「なぜ東大に映像学部がないんでしょうかね？近代化百年の穴ですな文化艺术は」。

監督は答えた。

「学生時代、吉田喜重たちと、映像学部をつくれ、という運動をやった。まったく相手にされなかった。欧米の官立には映像学部が必ずあるのにな。前世紀末、リュミエール兄弟が「工場の出口」を公開した。ヨーロッパの大学はこぞって反応し、フィルム・ファカルティー（映像学部）をつくった。しかし……創像性などまるで分からない連中ばかりで、どうしようもなかった……「音楽、これ不要不急」……西洋音楽の移入は急ぐ必要なし、つまり、要らない……西洋音楽が要るか要らぬかでもめた明治初期と同じ結論を出しやがった。「映像、これ不要不急」と。映像学部のないステート・ユニヴァーシティーなど存在価値はない。そのくせ創造性がいかに大事かなどと表層的に主張する。百年たったら変わるかな……この体質は、百年たっても、どうかな……」。

(かくれた天才)

世に名は出ないが、「かくれた天才」が大勢いる。「20世紀」500枚の殆どは、かくれた天才たちの仕事だ。

胸をはだけた若い男が、撃ってみろ！、とソ連の戦車にむかって立ちほだかる。一瞬のシャッ

ター・チャンスがそこを捕まえた「プラハの春」。若者の名前はエミール・ガロといい、プラチ
イスラヴァ市営公社の配管工だ。このスナップは全世界のマス・メディアに紹介され、たちまち
名を売った。この一枚だけでも、チェコとスロヴァキアと世界の人々は、プラハのこと、そして
世界について100年は語り続けることが出来るだろう。「20世紀」500枚。すべては「忘れられな
い映像」である。

「百年おきに帰っておいで、私のいとしい時間・百年の価値」——サッチモ。

(情報学部教授)